

電子版お薬手帳の普及には「単独利用」から「協働利用」へのパラダイムシフトが必要である

高齢者世代における利用実態と意識調査（調査1・2）に基づく、普及を阻む真の要因と解決策

【背景】医療DX推進の理想と生活実態の乖離



【期待】医療DX政策・ポリファーマシー対策として電子版の整備が進行。

【現実】高齢者の利用は極めて限定的。依然として「紙版」が主流で生活に浸透せず。

【要因と突破口】なぜ普及しないのか？

「高齢者のICTリテラシー不足」「利便性の否定」

調査1 (N=109) :
心理的障壁・環境との不適合
（「使い方がわからない」「不安」「操作への抵抗感」が真の障壁）

突破口（調査2：80代後半・10日間同伴観察）

- ・入力操作自体は支援があれば進行可能。
- ・「操作完了の判断」や「画面構造の理解」には家族等による声かけ・確認（介入）が不可欠。
- ・支援により不安が軽減し、継続利用が可能になる。

【転換】求められる設計前提のアップデート

	設計の前提	発生する感情	利用の結果
【現状】 自立的利用モデル	高齢者本人のみの 単独操作	不安・抵抗感・ 心理的負担	利用困難・ 継続への回帰
【提案】 協働的利用モデル	家族・薬剤師等の 支援者との協働	安心感・ 操作完了の確信	利用の継続と 社会への普及

【結論と提言】「サポータティブ・エコシステム」の構築

- ・電子版お薬手帳の利用は、高齢者単独ではなく「支援者との協働」によって成立する。
- ・普及に向けては、本人の自立のみを前提とした設計を見直す必要がある。
- ・制度と技術の両面から、家族や薬剤師等の介入・サポートを前提とした運用体制（協働的利用）を位置づけることが極めて重要である。

